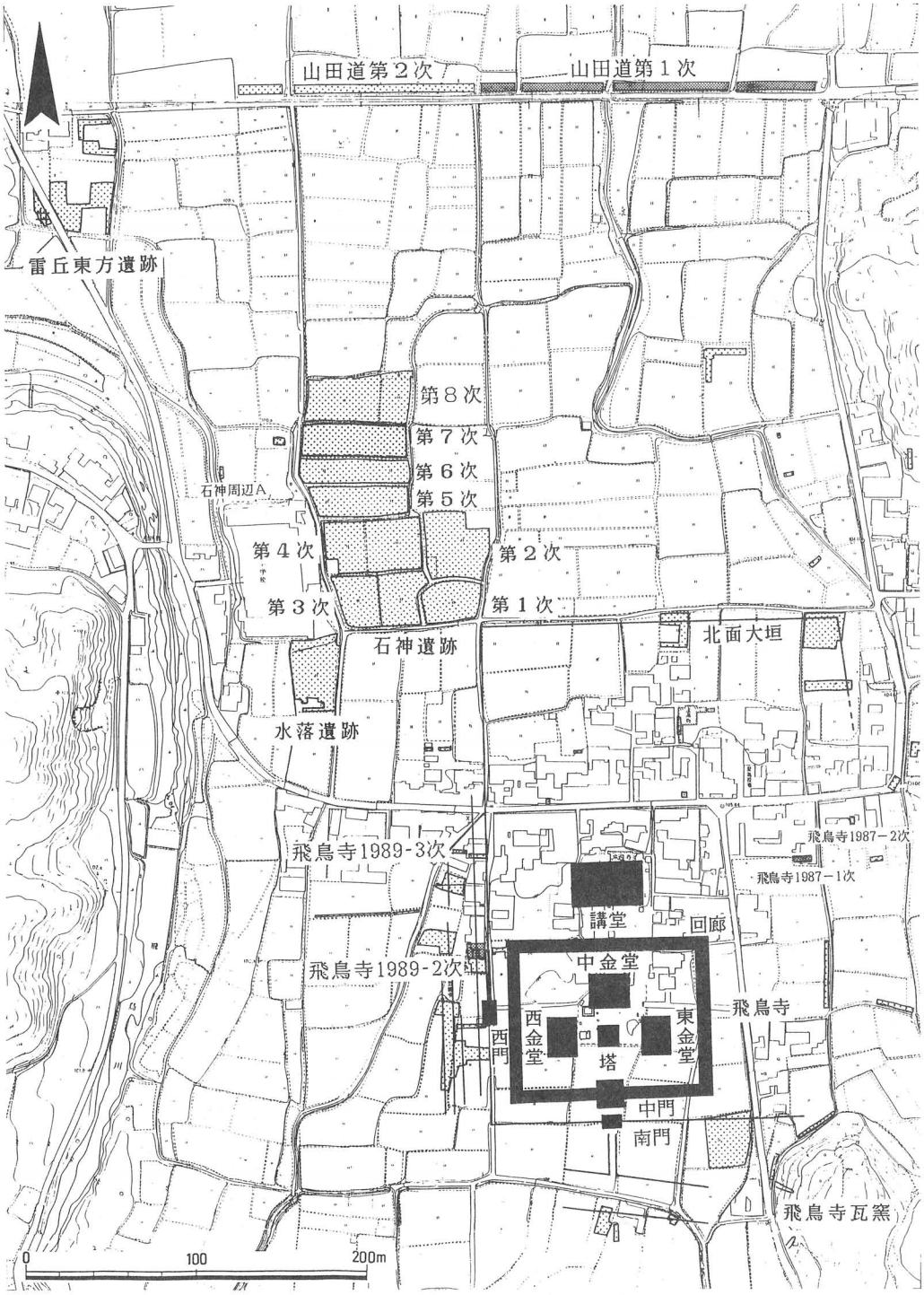
Ⅲ　飛鳥地域の調査



飛鳥寺周辺調査位置図（1：4000）

1　飛鳥寺の調査（1989－1･2･3次）

A　1989―2次調査

（1989年10月～11月）

この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更に伴う事前調査として、高市郡明日香村で行ったものである。調査地は飛鳥寺西面大垣の西に接し、西門の北30ｍの位置にあたる。東西10ｍ・南北10ｍの調査区を設定した。調査区の南半部は1969年に実施された奈良県教育委員会による飛鳥京跡第18次調査ですでに調査が行われており、調査区の中央部に幅約１ｍで底に石敷をもつ石組溝ＳＤ6885が検出されていた。

また、当調査地周辺の飛鳥寺西辺部では、当研究所による1956年の西門の調査（学報Ⅴ）をはじめ、いわゆる蘇我入鹿の「首塚」の周辺で県数委による数次の調査が行われている。当調査部でも、西面大垣の周辺で小規模調査を数回行っている。これらの調査によって、飛鳥寺の西側の地域には掘立柱塀・石組溝・石敷広場などの存在が確認されており、飛鳥寺と一体となった宮殿遺構の存在が明らかとなっている。

遺　構

遺構は耕土・床下直下の暗褐色砂質土の上面で検出したが、この層には遺物が若干含まれるため、整地層と考えられる。今回検出した７世紀代の主な遺構は、SD6885の北延長部・南北塀１条・石列抜取り痕２条・石敷・土管を用いた暗渠１条等である。これ以外にも10～11世紀の素掘り溝１条を検出した。南北塀SA05はSD6885の西約１ｍにあり、後世の素掘り溝SD07の溝底で５間分を検出した。柱間は約2.3ｍ等間である。柱掘形は一辺１ｍを超える大規模なものである。SA05は1985年に実施した飛鳥寺西門の西側の調査（概報15）でも検出されており総延長48ｍ・20間以上を検出したことになる。この塀の柱は真上に抜き取られ、その跡は飛鳥の他の遺跡と同様に黄褐色の粘土で丁寧に埋め戻されている。SA05とSD6855の切合関係はSA05の方が古い。また、SA05は飛鳥寺の西面大垣の西11ｍの位置に存在し、いかなる性格の塀であるかは

今後の慎重な検討が必要とされる。

石列抜取り痕SX01・SX03、石敷SX02・SX04は石組溝SD6885と一連の施設であり、飛鳥寺西面大垣とも一体であり、大垣から西に向って自然地形に沿って段々畑状に下がっていく施設の一部である。SD6885の側石も西側の側石の方が東側よりも約0.1m低くなっている。

暗渠SX06は調査区の西端で検出した。検出した土管は21本で長さ40㎝・径20㎝・玉縁長15㎝・厚さ2㎝を測るものである。据付の掘形の西肩は調査区外となって検出できなかったが、1985年の調査（概報15）では幅1.5mの規模であった。土管は掘形の東の下端に設置されている。この暗渠は塀に伴ったものか石組溝に伴ったものであるかは不明である。また、暗渠の内側は細かい粘土の堆積により、早い時期に使用不能となっていたものと推測される。暗渠掘形の暗渠直上部分には流水による堆積が認められるため、暗渠が使用不能になった後に開渠として使用された可能性もある。

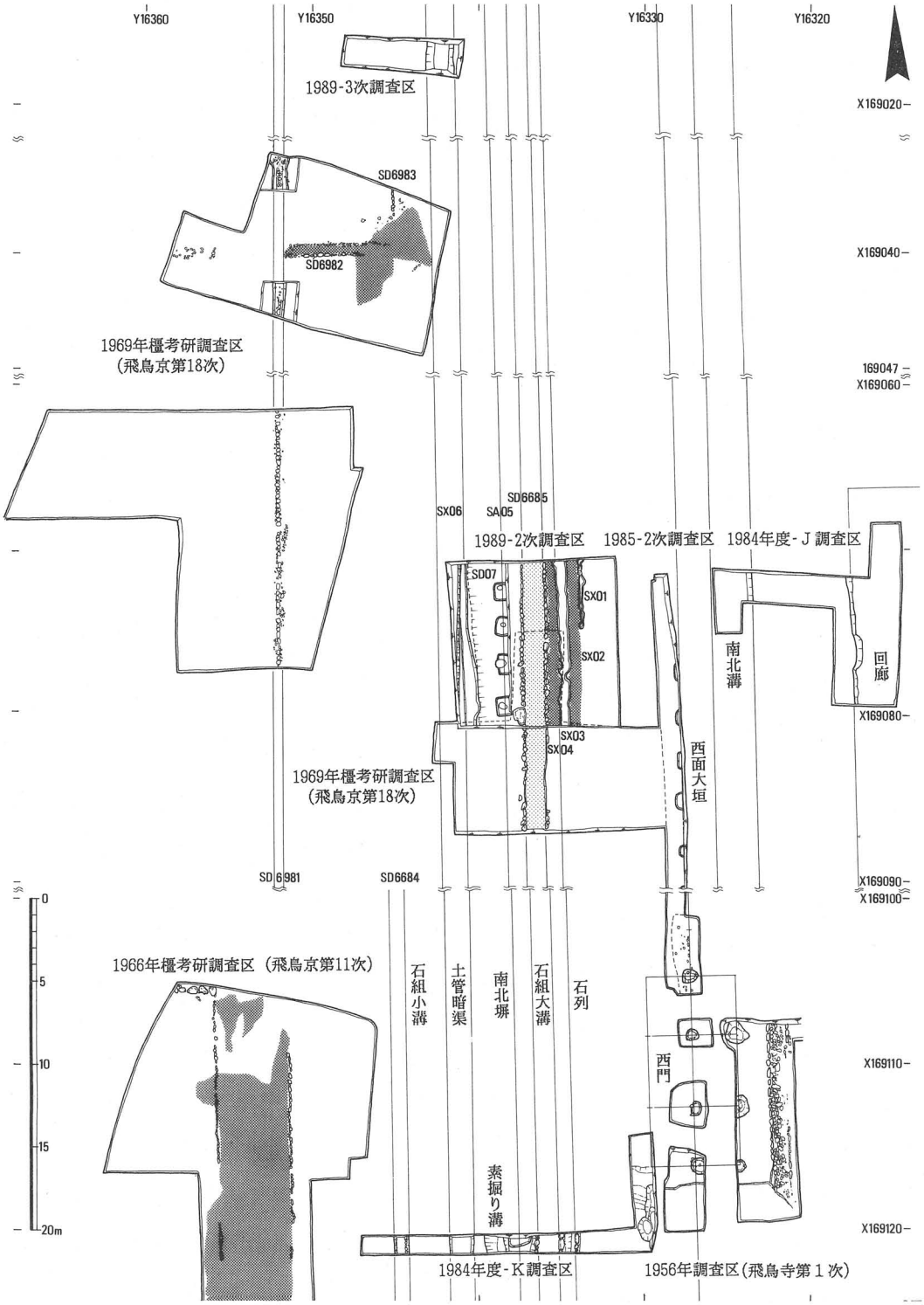
素掘り溝SD07はSD6885の西に接して流れる南北溝で、幅3mを測る。この溝から10～11世紀の土器が出土している。この溝のため、SD6885の西の側石の西側は流水に洗われて石面を現していたこともある。この溝の堆積状況は底部に砂礫層があり、相当の流量があったものと想定できる。

遺　物

出土した遺物は7～8世紀の飛鳥寺所用の軒丸瓦、7～8世紀の土師器・須恵器、10～11世紀の土師器・須恵器などであるが、量的には少ない。

ま と め

飛鳥寺の寺域に西接する地域は1966年の奈良県の第11次調査、1969年の第18次調査によって石敷広場・石組溝等の遺構が広がることが確認されていた。奈良国立文化財研究所が1985年に実施した、西門の西側の調査では、県の調査で確認した石組遺構の他にも柱穴・素掘り溝（暗渠掘形）等の7世紀代の遺構の存在が確認されていた。今回の調査では、先行する調査で検出した遺構の追認に終わったが、それらの遺構が飛鳥寺の西面大垣と平行して、少なくとも南北50mに及ぶことを確認することができたことは、大きな成果であると言えよう。



飛鳥寺西方遺構配置図（1:400）

これらの遺構が飛鳥寺と直接に関係するものであるか、あるいは寺を取り巻くように存在する宮殿遺構の一角であるかは今後の調査の進展を待ちたい。また、10～11世紀のかなりの流量があったと推定できる南北溝の存在は、西方に向かって強い傾斜で落ちていく自然地形に逆らって掘削されたものと考えられ、平城遷都以後の飛鳥寺の存在形態を考える上でも重要な資料を得ることができたものと考えられる。

B　1989—3次

(1989年11月)

この調査は納屋新築にともなう事前調査として行ったものである。調査地は1989—2次調査区の北約60mの位置にあり、1989—2次調査区で検出した暗渠SX06などの存在が予想されたため、東西7m・南北2mの調査区を設定した。

検出した主な遺構は素掘溝・土坑などである。

素掘り溝は調査区の東端で検出したものであり、幅1.5mを測り、深さは約1mである。SX06の北延長上にあたるが土管の暗渠は抜き取られており検出できなかった。しかし、流水の堆積が認められ開渠として使用されたものであろう。　開渠の西肩から西は、平安時代の土坑で破壊されており、予想された石組溝SD6684などの顕著な遺構の検出はできなかった。しかしながら、飛鳥寺の西面大垣の外側に、南北100m以上にわたって排水施設が巡っていたことが確認できたことは、飛鳥寺およびその西側の宮殿施設の性格を考える資料を得られたということだけでも大きな成果であろう。

C　1989—1次調査

(1989年7月)

この調査は住宅改築に伴う事前調査として行ったものである。調査地は飛鳥寺西面大垣の西に接し、西門の北約60mの位置にあたる。東西2.5m、南北1.5mの調査区を設定して調査したが、近世以降の浅い東西溝2条・井戸1基のほか顕著な遺構は検出できなかった。

2　奥山・久米寺の調査（1989－1次）

（1989年８月～10月）

この調査は久米寺庫裡の改築申請に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山で行ったものである。当調査部は、1987年の久米寺塔基壇の発掘調査に際し、庫裡の東側・北側にも調査区を設け、金堂基壇の南辺・西辺の一部を検出した。今回は1987年の調査区を含めて東西約18.5ｍ・南北約14ｍの調査区を設定した。調査の結果、金堂およびその周辺の状況が判明した。

遺　構

調査区の層序は北半と南半で異なる。南半では、約0.3ｍの表土の下に、多量の瓦と礫を含む灰褐色粘質土があり、その下が遺構面となる。北半では、庫裡建設時の整地土（近世、厚さ0.1～0.4ｍ）があり、その下が金堂基壇土となる。

主要な検出遺構は、金堂・参道（金堂前）・境内瓦敷である。

金堂　西を正面とする。基壇規模は東西23.4ｍ（80尺）に復原でき、南北規模は未確認（おそらく18ｍ前後）である。この基壇は重成基壇の可能性がある。これは、南面階段地覆石の北端が、基壇外装より0.6ｍ内側にくい込むからである。この0.6ｍを下成基壇の出とすれば、上成基壇の東西長は22.2ｍ（75尺）となる。基壇高は不明（現存高0.4ｍ）であるが、１ｍ以上であろう。基壇の周囲には幅約0.7ｍの犬走りがめぐる。基壇は全面的改修を一度経ている。改修では、創建時の外装をすべて抜き取り、金堂周囲と一運で厚さ約0.3ｍの整地をおこなってから、外装・階段・犬走り縁石を据えている。この整地土には凝灰岩小片が多く入っている。基壇外装はすべて抜き取られているが、地覆石に花崗岩切石、羽目石等には凝灰岩切石を用いたと推定される。犬走り縁石には花崗岩自然石を用いているが、改修時のものである。階段の東側および西側５ｍまでは長さ0.6～１ｍの石、それ以外の所には長さ0.2～0.5ｍの石を並べる。

礎石位置は現状では不明であるが、境内に１個現存する径1.1ｍほどの円形造りだしを持つ花崗岩製礎石を使用した可能性がある。

塔から金堂へ向かう参道に面して階段がつく。階段は幅約3.8ｍ、出は約１

mである。重成基壇とすれば、上成基壇からの出が約1.6mとなる。地覆には花崗岩切石、耳石・段石には凝灰岩切石を用いている。耳石の地覆石3個、段石の地覆石2個を据わった状態で検出したが、いずれも改修時のものである。東南隅の地覆石には円形（直径0.1m）と長方形（0.15×0.1m）の枘穴がある。

基壇は掘り込み地業・版築により造成されている。掘り込み地業は、地覆石の位置までの範囲で、深さは創建時地表面から0.9mである。版築は大別3工程で行なわれ、下から順に、橙色系土（厚さ0.25m・版築土5～7層）・暗灰褐色系土（厚さ0.4m・版築土9～12層）・明橙色系土（厚さ0.85m以上・版築土18層以上）を積む。1987年に調査した塔基壇土中には、7世紀前半の瓦が多量に含まれていたが、金堂基壇土中には、ごく少量の土器片（時期不明）が含まれるのみである。

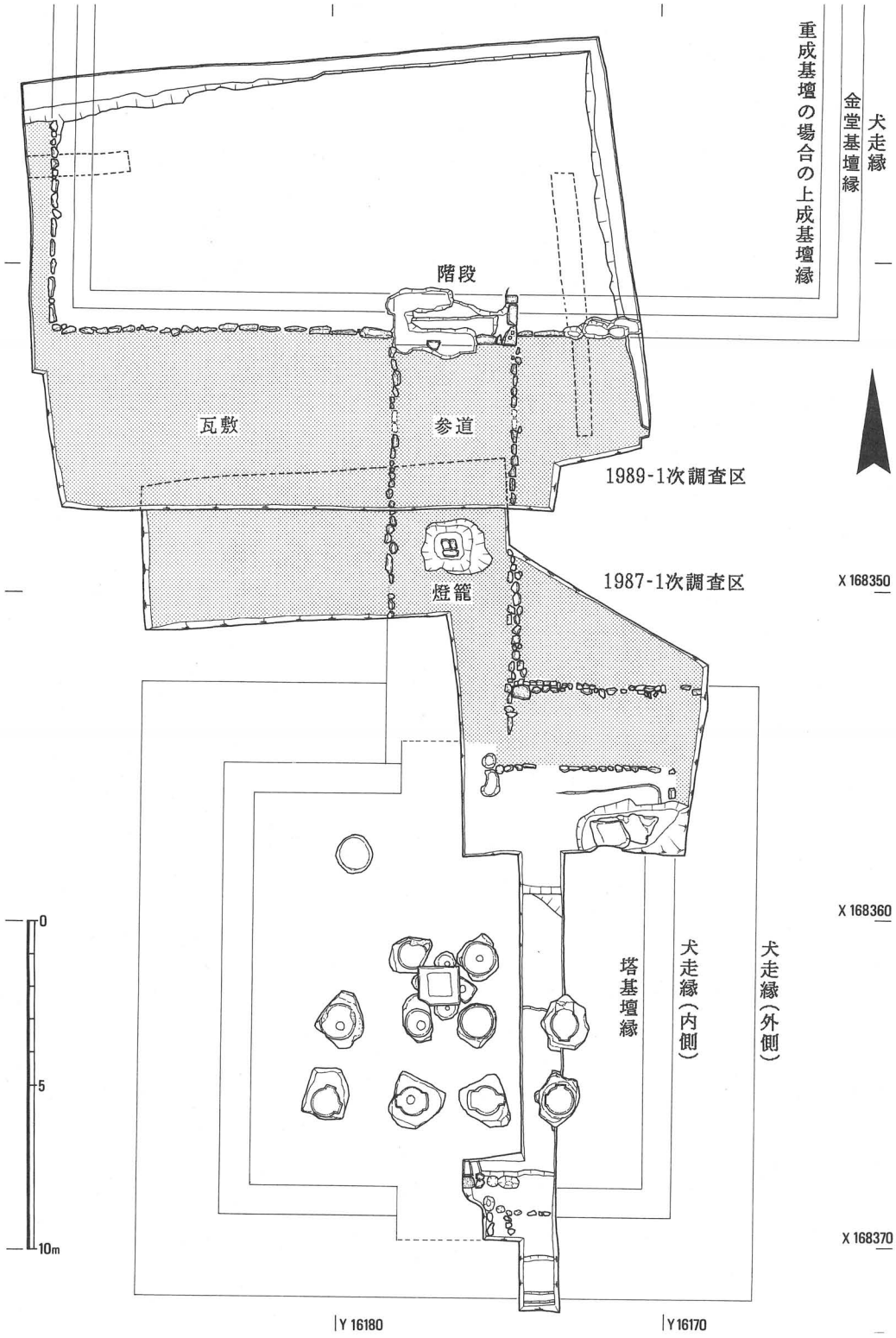
参道　塔と金堂をつなぐ。長さ約12m・幅約3.8mである。金堂基壇改修時の整地土と一体で造られ、周囲の瓦敷面より約0.1m高い。参道の側石には花崗岩自然石を用い、上面には瓦を敷いている。瓦敷には部分的に上下の2層がある。金堂階段のすぐ南側では、小礫敷を介して上下2層があり、下層は平瓦の凸面を上にして整然と並べ、上層は雑然としている。その他の場所は雑然とした1層のみである。1987年の調査では、参道積土から7世紀後半の土器が出土した。

境内瓦敷　金堂の周辺には、瓦を全面に敷いている。この瓦敷は、金堂基壇改修時の整地土上に乗り，調査区西端から東へ9mの地点以西では、平瓦の凸面を上にして整然としているが、それ以外の場所ではかなり雑然としている。含まれる瓦は、7世紀前半～7世紀末・8世紀初頭の時期のものが多いが、一部奈良時代の瓦を含む。瓦敷はおそらく回廊内全面に敷かれていたであろう。回廊内に瓦を敷き、境内を整備した類例としては山田寺が知られる

遺　物

主要な出土遺物は、瓦塼類・土器類・塼仏・金具である。土器類は、ほとんどが久米寺庫裡建設時の整地土から出土した近世のものである。塼仏は1点あり、山田寺出土品と同笵である。近世の整地土から出土した。瓦塼類は多量にあり良好な資料が多いので、以下で詳しく紹介する。

奥山・久米寺調査遺構配置図（1:200）→


犬走縁
金堂基壇縁
重成基壇の場合の上成基壇縁
階段
瓦敷
参道
1989-1次調査区
1987-1次調査区
燈籠
X 168350
X 168360
X 168370
塔基壇縁
犬走縁(内側)
犬走縁(外側)
0
5
10m
Y 16180
Y 16170

瓦塼類　総計650袋出土した。飛鳥時代から近・現代までの瓦があるが、平安～中世のものはほとんどなく、大部分は７世紀代に属する。近世瓦は約１割、ほかに奈良時代のものが含まれる。

出土した瓦の内訳は、大量の丸・平瓦のほか、軒丸瓦175点・軒平瓦64点・熨斗瓦76点・面戸瓦５点・鬼瓦１点・近世の菊丸９点・不明瓦製品13点・鬼瓦２点である。ほかに塼仏１点がある。軒丸瓦・軒平瓦のうち、それぞれ26・22点は近世～現代のものであるので、それらを除いた軒丸瓦149点・軒平瓦42点について、型式別出土点数をＰ73の表に示した。

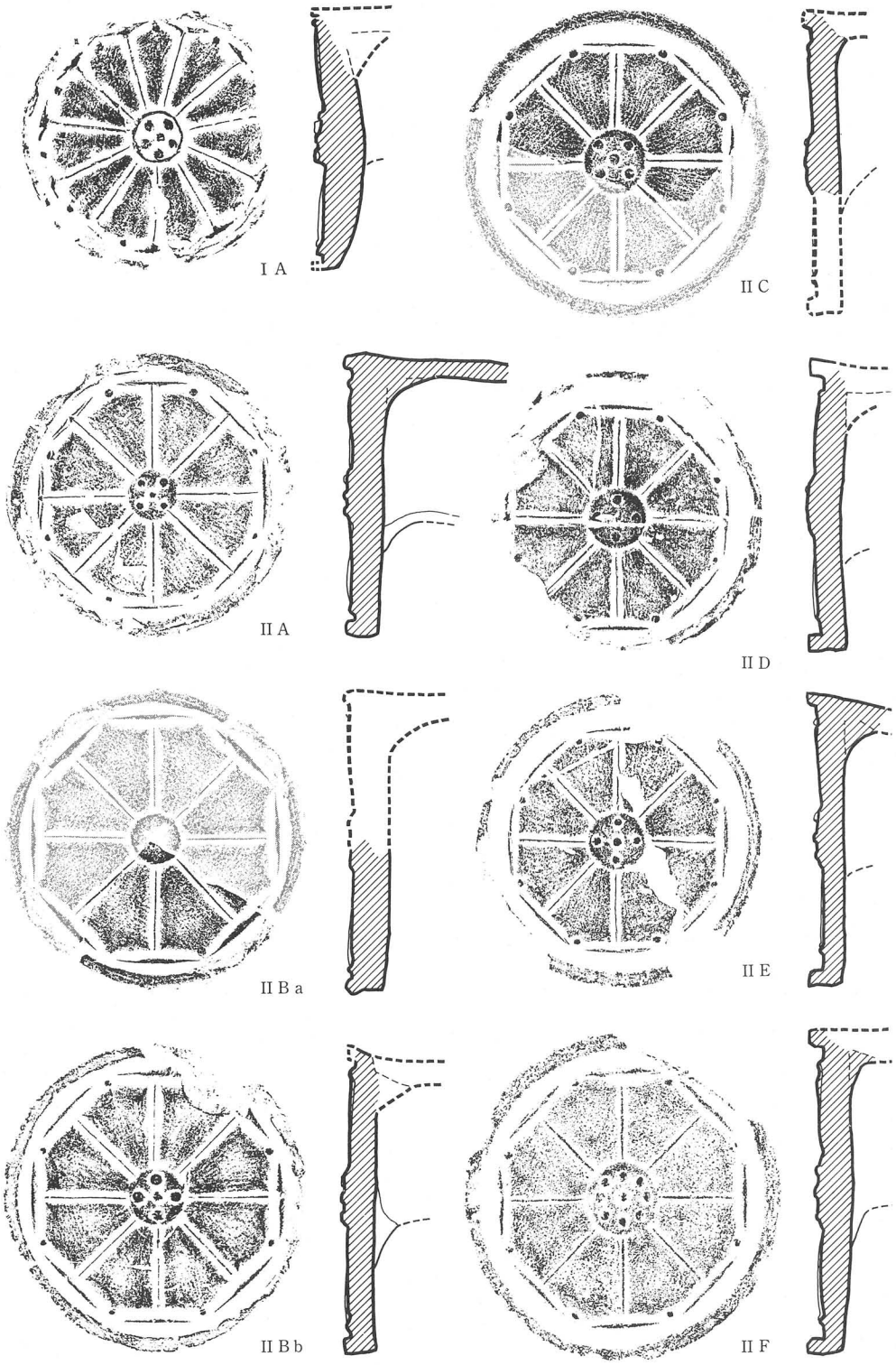
軒丸瓦で最も多いのはⅡ型式の61点で、次いでⅣ型式29点・Ⅷ型式24点・Ｘ型式15点が続く。塔跡の調査でⅧ型式の出土が多かったところから、これと重弧紋軒平瓦の組合せが塔所用で、金堂所用の軒丸瓦はⅡ型式と考えてよかろう。また軒平瓦では、重弧紋系の１・２型式が29点と多く、次いで大官大寺式の３型式（6661型式）16点であり、今回他型式は出土しなかった。Ⅱ型式には軒平瓦は伴わないと考えられる。

以下においては、従来より遺存状況の良好な資料が増えたので、奥山久米寺を代表する軒丸瓦Ⅱ型式を中心に『概報18』における報告を補足しよう。

Ⅰ型式は無子葉単弁で、角張った弁端に点珠を配した、いわゆる「角端点珠式」の奇数弁の蓮華紋軒平瓦である。外縁は無紋の直立縁。Ａ・Ｂ２型式あるが、今回はＩＡ型式のみが出土した。

ⅠAb型式　弁数は11、弁肉やや厚く、弁央が盛り上がるが稜は作らない。弁端が若干丸みを帯びる。中房は小さく低い凸型で、大振りの蓮子を１＋５配する。弁間の界線は細く、一部時計回りに彎曲する。同笵の飛鳥寺Ⅲ（＝豊浦寺ⅡＡ）には、中房周縁を彫り加えたｂ種と、元のａ種とがあるが、当寺跡からはｂ種のみが出土。

Ⅱ型式も無子葉単弁８弁の蓮華紋軒丸瓦である。弁端は三角形状を呈し、弁間の界線が直線的な幾何学紋風の蓮華紋である。稲垣晋也が「弁端剣尖形点珠」、近江昌司が「角端点珠Ｂ類」と呼んだほか、「奥山久米寺式」という呼称もある。すべて均等割りの８弁で、花弁は薄肉で平板。外縁には角張った直立縁と、



奥山・久米寺出土軒瓦（1：4）

上面が丸みを帯び断面蒲鉾形を呈するものとがある。いずれも無紋。中房は概して小さく、断面が低い半球形状をなす。蓮子は１＋４が圧倒的に多く、１＋８もある。笵はＢタイプで、薄い粘土板を順次詰め込む。二重縁のものもある。瓦当裏面はナデ調整によって平坦に仕上げる。接合前の丸瓦の加工は筒部先端の凹凸両面を斜めに削る手法が多く、まれに刻み目を入れた例もある。しかし、片枘状に加工した類も存在する。丸瓦は玉縁式であるが、筒部と玉縁部を一体で形成しない類である。胎土砂混じりで粗いものと、精良で焼成堅緻なものの２種がある。以上のような特徴によって、少なくとも７種に分類できる。

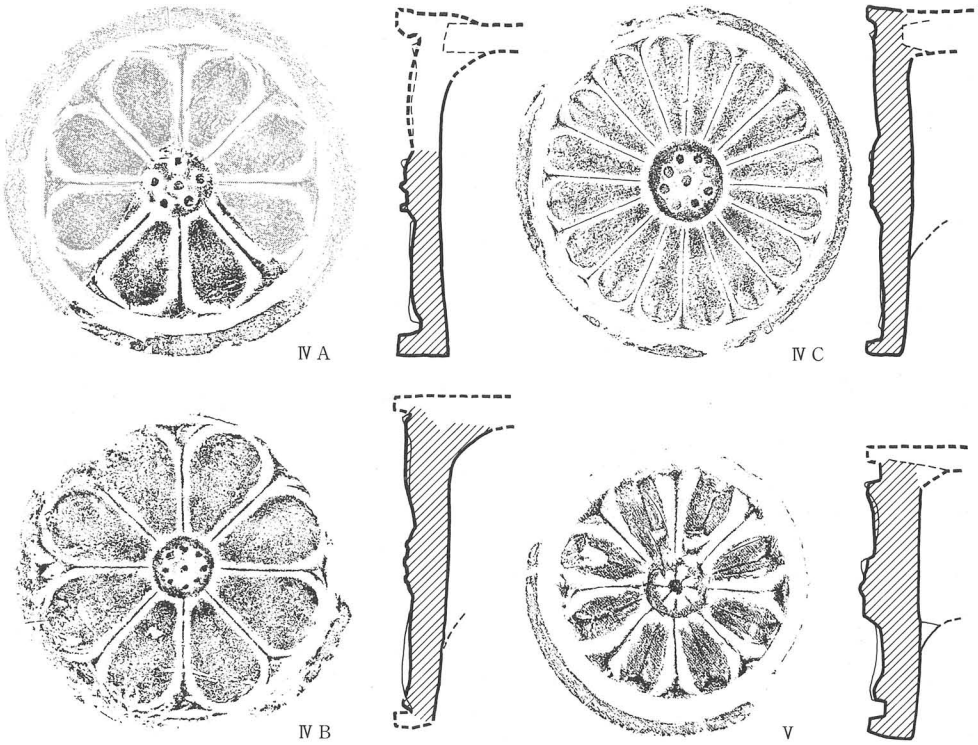
ⅡＡ型式　面径16㎝強の小型品である。外縁は直立縁だがやや内傾斜する。弁区との境の溝が極端に狭くＶ字形をなす。界線は細く断面三角形状に尖り、弁端まで突き抜ける。弁央が若干盛り上がる。中房は小さく、１＋４の蓮子も小粒である。灰色で硬い。大和天神山瓦窯に同笵例と思われるものがあり、当瓦窯の製品である可能性が強い。

ⅡＢ型式　弁区との境の溝幅が狭い点でＡに似るが、溝底がやや丸みＵ字形に近く、面径19㎝と大きい。また弁も平板、界線も細く弁端にまで達さない。中房は低く、１＋４の蓮子は大振りである。外縁が低く上面が丸い蒲鉾形状をなすａ種と、比較的外縁が高く上面が平らなｂ種とがあり、後者を笵の彫り直しと判断する。ａ種は灰色ないし灰黒色を呈し堅く、瓦当裏面に円圏状のナデが顕著。それに対してｂ種は褐色で、胎土の細砂が混じり焼成は軟質である。

ⅡＣ型式　外縁が丸く、弁区と境溝が広い類である。弁は平板で、界線は太く丸い。中房は平板で、１＋４の蓮子は大きくしかも盛り上がる。弁端の点珠も大振り。灰色で堅緻なものと、淡褐色で軟質の２様がある。

ⅡＤ型式　外縁が角で高いが、若干丸みを帯びる。溝幅がやや広い。中房は大きめで１＋４の蓮子も大振り。すべて淡褐色～赤褐色で軟質。平野山（楠葉西遺跡）瓦窯、山城久世廃寺出土品が同笵である可能性が強い。

ⅡＥ型式　外縁角型で細く高く、溝幅が最も広い。中房はふっくらとし、蓮子は１＋４で小粒で高い。胎土に白色砂粒を多くまじえ、暗灰色と褐色があるが、双方とも堅緻な焼きである。石神遺跡①が同笵。



奥山・久米寺出土軒瓦（1:4）

種別	型　式	数		備　　考
軒丸瓦	ⅠA	1		角端点珠単弁11弁
	ⅡA	8	61	角端点珠単弁８弁
	ⅡBa	9		
	ⅡBb	5		
	ⅡB	8		
	ⅡC	2		
	ⅡD	7		
	ⅡE	3		
	ⅡF	7		
	Ⅱ	12		
	Ⅲ	5		単弁８弁　高句麗系
	ⅣA	8	29	単弁８弁
	ⅣB	8		
	ⅣC	13		単弁16弁
	Ⅴ	2		
	Ⅶ	1		
	ⅧA	18	24	単弁８弁　山田寺式
	Ⅷ	6		
	Ⅸ	4		複弁８弁（飛鳥寺XIV）
	XC	3		大官大寺6231C
	X	12		

種別	型　式	数		備　　考
軒丸瓦	XIA	3		平城宮6285Aa
	XIIA	1		平城宮6279Aa
	XIIIA	1		平城宮6274Ab
	新	1		複弁・外区珠紋帯
	不明	1		
	総数	149		
軒平瓦	1	3		三重弧紋
	2A	16	26	四重弧紋
	2B	2		
	2C	1		
	2	7		
	3A	1	16	大官大寺6661A
	3B	10		大官大寺6661B
	3	5		
	総数	42		
道具瓦	鬼瓦A	1		角端点珠単弁８弁
	熨斗瓦	76		
	面戸瓦	5		

奥山・久米寺出土瓦一覧表

IIF型式　面径18.5㎝と他種より大振り。外縁角型で、溝幅が広い。しかも中房が極めて大きく、断面半球状を呈し、蓮子も１＋８と多い。胎土に砂粒を多くまじえ、淡褐色で焼成軟質である。

Ⅳ型式は花弁端が円く整い、先端から中心に向かって短い鎬状の切込みを施した無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦で、弁肉が厚めで弁央がふくらみ、弁端が肥厚して稜をなす型式である。瓦当面径20㎝近くの大型品が主体をなす。弁数は８弁。弁間の界線は細く、先端部は高く盛り上がる。中房も大きく、半球状に丸い。外縁は狭く、中高。瓦当裏面はナデ調整によって平坦に仕上がるが、周縁端部がわずかに突出する。瓦当との接合にあたって、丸瓦筒部先端を凹凸両面から斜めに広く削って楔形にし、さらに両側端部を斜めに切り欠く。その上さらに縦方向の刻み目をかなり密に入れている。丸瓦は行基式。

ⅣA型式　外区と弁区との境に狭い溝がある。弁区が鎬状に尖り、外側に小さく突出する。蓮子は１＋５で、細く突出する。

ⅣB型式　弁区と外縁間の溝は狭く、ほとんど無いといってよい。弁端がわずかながら肥厚気味に反転し、切込みが一見点珠状をなす。中房の蓮子は１＋８で大きく、各界線に対応する。

ⅣC型式　面径20㎝近くの大型瓦で16弁のもの。弁端が反転気味にふくらみ、点珠のかわりに弁央を走る鎬状の線を徐々に肥厚させて外方にわずかに突出させている。中房は半球形に丸く、大振りの蓮子を１＋８顆配する。

Ⅴ型式も無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦で、弁端が強く反転し、弁中央に稜が通る。外縁は素紋の直立縁。瓦当裏面にハケメを有する。

まとめ

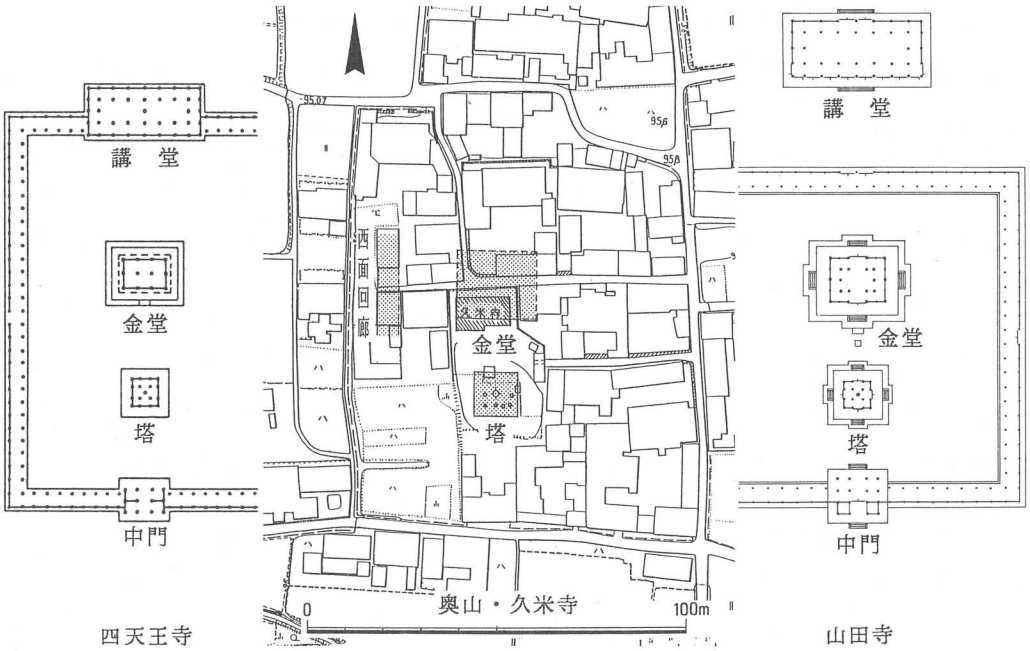
金堂の規模が推定できるようになった。飛鳥地域の７世紀代主要寺院の金堂と比較すると、久米寺金堂は、基壇規模では山田寺金堂をやや上まわり、川原寺中金堂より小さい。金堂建物の規模は不明であるが、桁行は５間となろう。築造時期は，基壇積土の状況から判断して、７世紀後半建立の塔より古く、出土瓦からみて飛鳥時代初期、７世紀前半の中頃までさかのぼる可能性が強い。飛鳥～奈良時代の寺院では、金堂より塔が遅れて造営されることが多く、その

間数十年経過することすらある。

金堂の基壇は7世紀後半以降に大がかりな改修をうけ、同時に回廊内に整地し参道を設けている。これは、塔の建設時の可能性が強い。さらに奈良時代には回廊内に瓦を敷き境内を整備している。

伽藍配置はどのようになるのであろうか。伽藍の造営方位は南北であり、南に塔、北に金堂がある。講堂はかつて石田茂作博士が推定したように、金堂北方の微高地であろう。したがって、四天王寺式か山田寺式となるが、前者の可能性が強い。金堂基壇北縁から講堂基壇南縁までの距離が約25mで、山田寺の約42mに比して狭く、北面回廊を金堂・講堂間に通すにはやや無理がある。また回廊の東西規模が約66mであり、約88mを有す山田寺に比してかなり南北に細長くなり、この点でも四天王寺式に近い。

今回の調査で、久米寺の金堂遺構が、基壇の上半が削られてはいるものの、犬走り・階段・周囲の瓦敷・参道について、きわめて良好な状況で検出できたことは、大きな成果である。花崗岩・凝灰岩切石を使った基壇化粧、入念な基壇構築法は、飛鳥諸寺の中でも、一級の内容の寺院であることを窺わせる。



奥山・久米寺、四天王寺、山田寺伽藍配置比較図（1:2000）

3　山田寺第７次調査

（1989年10月～1990年２月）

当調査部では、特別史跡山田寺の追加指定・土地公有化に伴い、史跡整備の資料を得るため、1976年以来６次の調査を行い、伽藍配置や塔・金堂・講堂・中門・回廊の規模や構造などを明らかにしてきた。今回は、南門の位置や構造・南門の南の利用状況・寺域の規模などの解明を目的に調査を実施した。

調査地は南北に連なる山塊から西に派生する小丘陵の北裾にあたる。この裾部は西に低い雛壇上の水田となっており、南北に長い二枚の水田に東西幅10～30ｍ、南北長55ｍの調査区を設定して調査を実施した。面積は約1150㎡である。

遺　構

調査地の基本層序は、調査区の北半と南半では大きく異なる。北半では耕土・床土・黄灰褐色土の下が整地土となるが、中央部付近では、床土の下に中世の遺物を含む青灰色粘質土・青灰色微砂土が厚さ0.5ｍほど堆積し、地表下1.6ｍで整地土上面に至る。調査区南東端では、床土下に暗灰色砂質土が堆積し、地表下0.45ｍで岩盤に至る風化土層となる。整地は調査区北東部から始まり、東西は調査区の幅、南北は南へ約48ｍの位置まで行われている。整地の厚さは調査区東北隅付近では10㎝にも満たないが、調査区中央付近では厚さ1.9ｍ、計13層にも及び、５～30㎝の厚さで砂質土や粘質土を交互に用いている。

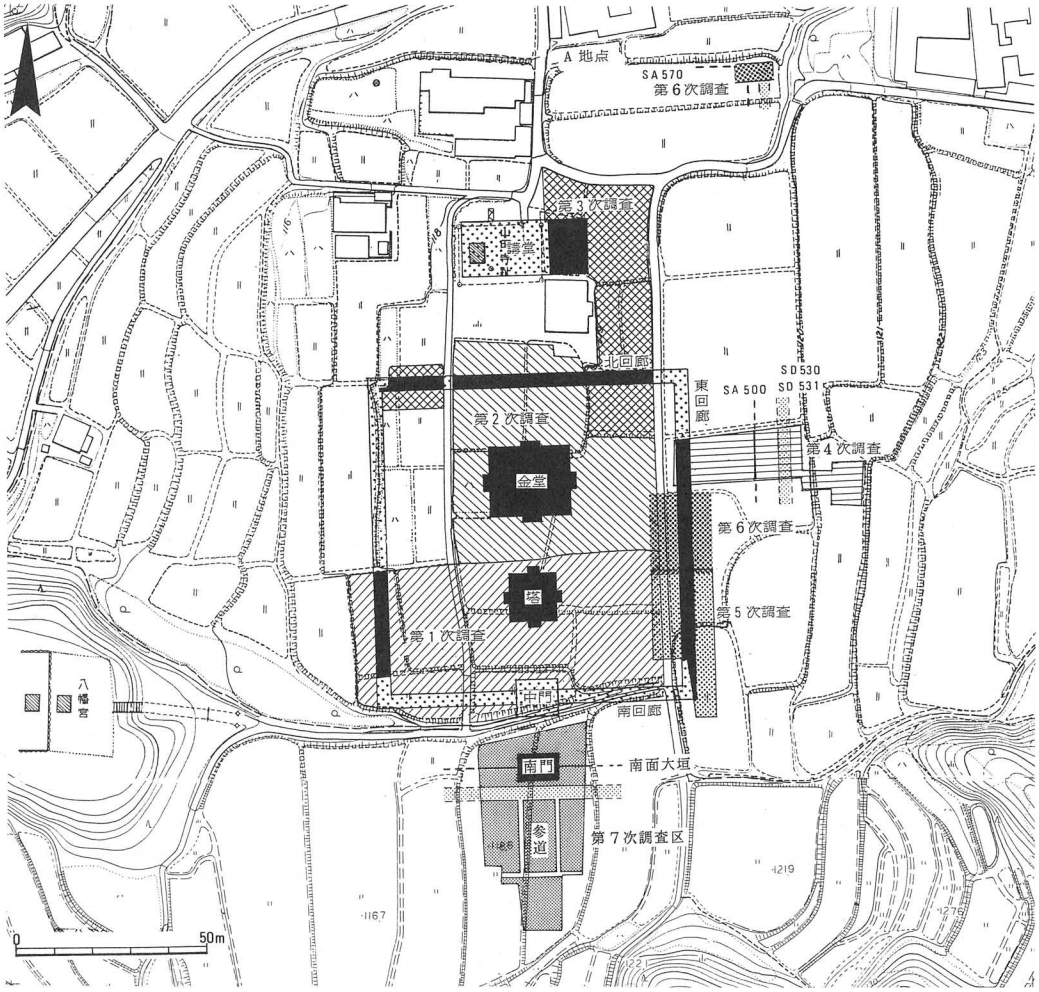
遺構は整地土上と整地土下で検出した遺構に大別できる。整地土上の遺構は、中世の小溝を除くと大半は南門に係わる時期のものであり、整地土下で検出した遺構は当然ながら山田寺造営前の時期と考えられるものである。

整地土上で検出した遺構はさらに南門造営前と造営後に細別できる。

南門造営前の遺構　東西方向の掘立柱塀ＳＡ600・615・621・624、東西溝ＳＤ601・609、斜行溝ＳＤ607がある。

東西塀ＳＡ600は南門造営前に寺域の南を閉塞する施設である。後の南門の棟柱筋上に、12間分検出した。柱掘形は一辺1.6ｍ前後、深さは1.65～1.9ｍあり、柱位置に平石を据えた例も認められる。柱は門より西は南北方向、門を含

めた東は東西方向に全て抜き取られる。柱が抜き取られていることや南門の礎石下に柱位置があることから、柱間寸法を確定し難いが、中軸線上の１間は金堂や回廊の基準尺と同じ高麗尺で11尺（約3.96ｍ）、その他は6.5尺（約2.35ｍ）、または中軸線上の１間を９尺、左右の脇間を7.5尺と推定することも可能である。いずれにせよ中軸線上の１間は他よりも若干広く柱間をとり、通路としていたと考えられる。また、瓦の出土量から瓦葺の塀であった可能性が強い。塀SA621・624は、東西溝SD625Ａの南肩で検出した。いずれも上半部をSD625掘削時に削平されている。SA621は1.75ｍで２間分，SA624は１間分・1.8ｍを検出した。東西塀SA615はSA600の南14.8ｍにある。５間分を検出した。柱掘形



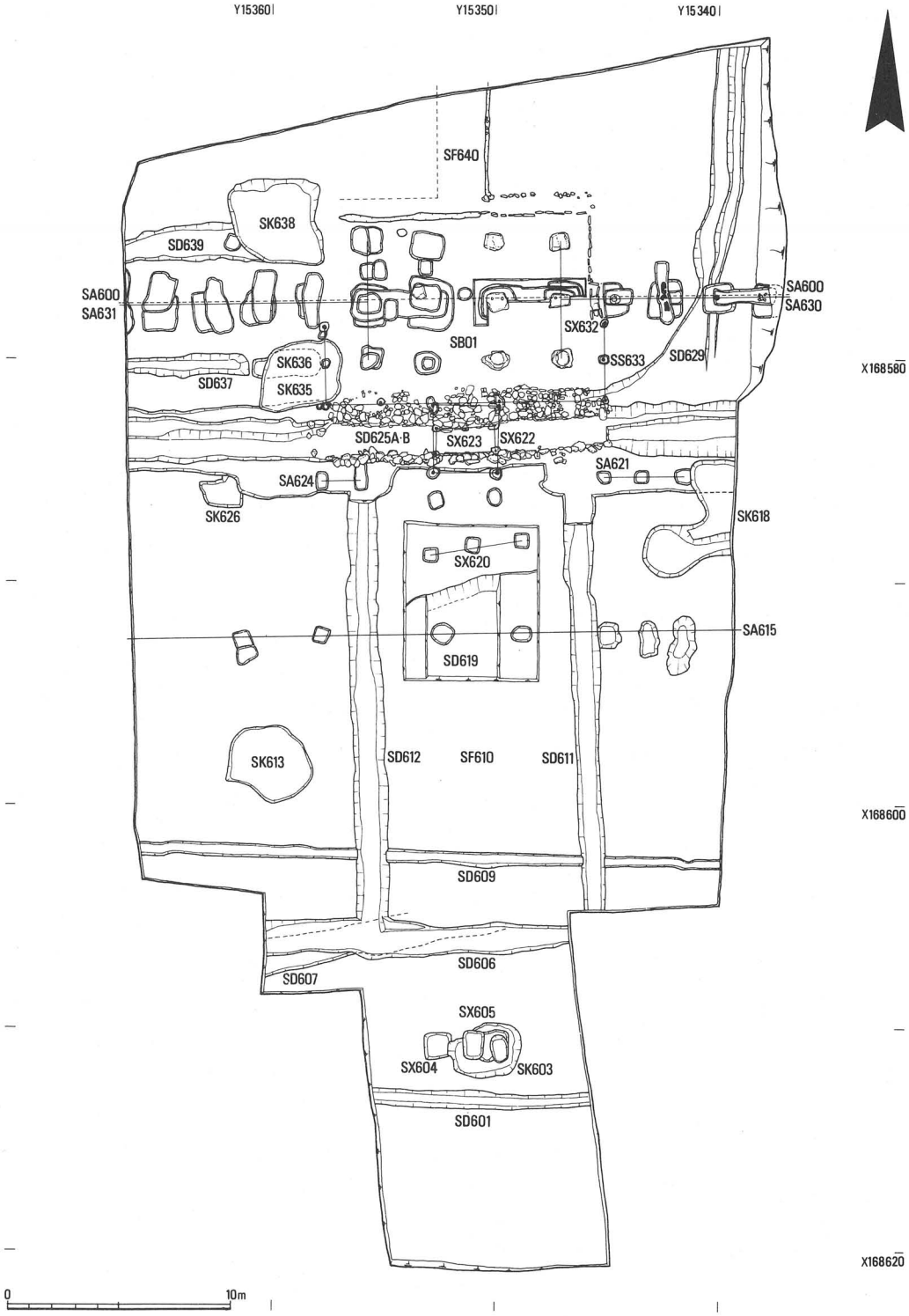
山田寺調査位置図（1:2000）

の平面は不整形を呈するが、深さは1.2 m前後である。柱間寸法は3.5 ～5.4 mと不揃いである。東西溝SD 609・601は同規模の西流する素掘り溝で灰褐色砂が堆積する。幅0.6 m・深さ 5 ～20 ㎝である。斜行溝SD 607は北で西へ振れながら西流する。幅1.6 m・深さ0.2 mである。

南門造営後の遺構　南門SB 01、SA 630・631、暗渠SX 632、足場穴SS 633、参道SF 610・640、東西溝SD 625、橋脚SX 622・623のほか東西溝 3 ・斜行溝 1 ・土坑 6 などがある。

南門SB 01は花崗岩製礎石 6 個と礎石抜取跡 6 個が残っていることから、正面 3 間・側面 2 間の建物となる。柱間寸法は正面 3 間が唐尺（1 尺＝約29.5 ㎝）で10尺等間、側面 2 間は2.62 m等間であり、本来 9 尺等間を意図したと考えられる。整地土を若干掘り凹め、根固め石を用いずに礎石を据え、その後に厚さ15 ㎝ほど基壇土を積みたし基壇を築成する。礎石は南面の 2 個のみに円形の柱座を造り出す。また、棟通りの礎石には扉の軸を受ける軸摺穴（直径12 ㎝前後、深さ 5 ～6.7 ㎝）があり、棟通りの 3 間全てに扉が設けられたことになる。基壇は縁に榛原石の板石や花崗岩玉石を並べた簡単な造りで、東西約11.65 m・南北7.84 m、礎石上面までの高さは南で0.5 m、北で0.1 mとなる。また、基壇の南面では玉石を敷きつめた犬走り、北面では玉石を縁石として内側に瓦を乱雑に敷いた犬走りが残るが、いずれも奈良時代と考えられる。南門造営時の足場穴SS 633は棟通りより南で検出した。いずれも粗割りにした角柱が残る。

南門にとりつく掘立柱塀は東で 4 間分、西で 5 間分を検出した。直径30 ㎝の柱根が 2 本残り、柱間は 8 尺等間である。前身の塀SA 600の柱を溝状に抜きとり、その抜取り穴を利用して前回よりも浅い位置に柱を据えている。このため柱の下に瓦を敷きつめて、さらに柱に刳り込みをいれ、南北から副木を添え、不等沈下やねじれを防いでいる（81頁図）。また、東の塀SA 631の柱は全て抜きとられているが、いずれの抜取り穴も瓦を敷きながら版築状に埋められている。このような入念な埋め戻しの状況は、塀の後に築地に改造されたことを想定させる。暗渠SX 632はSA 630が門にとりつく部分で検出した。側石として榛原石や塼を用い、塀の柱筋のみに榛原石の蓋石をする。南北長1.5 m、内



山田寺第７次調査遺構配置図（1:300）

法幅0.25～0.32㎝、深さ0.2mである。

東西溝SD625A・Bは南門のすぐ南にある。当地区の基幹排水路と考えられ当初は幅2.5～3.75m、深さ1.0mの素掘り溝（SD625A）であったものが、奈良時代になって基壇幅に合わせて両岸を石で護岸した溝（SD625B）となる。SD625Aは参道の東側溝の東と西側溝の西では他の部分より若干幅広くなっている。また、鞴羽口、銅滓とともに飛鳥Ⅳの土器の出土した土坑SK626を壊して掘られており、この溝の開削時期は天武朝と考えられる。SD625Bの石組部分は幅1.3m・深さ0.9m前後である。堆積土には砂礫を含み、相当の水量のあったことを窺わせる。多量の瓦塼類や奈良・平安時代の土器が出土した。

参道SF610は南門に至るもので、素掘りの東側溝SD611と西側溝SD612を伴う。路面幅8.6m・溝心々距離約10mで、南門の正面規模にほぼ合わせている。両側溝は東西溝SD625から溢れた水を受けて南流し、東西溝SD606と合流して西流する。西側溝SD612からは鞴羽口・坩堝・鉄滓とともに奈良時代中頃の土器が出土しており、SD625Bの時期には埋没していたと考えられる。

橋脚SX622・623は各々東西溝SD625A・Bの時期に南門中央の柱間にあわせて架けられる。SX622は1間で西北を除く三方の橋脚を溝肩に検出。柱間は南北2.95m・東西2.85m。SX623は石組溝内にある。東西2間；2.6m、南北1間；1.1mである。橋脚は東南隅が円柱、他は一辺0.2m前後の角柱である。

参道SF640は南門から中門に至る参道で玉石を並べた東縁石の一部を検出した。幅約2.2mに復原できる。

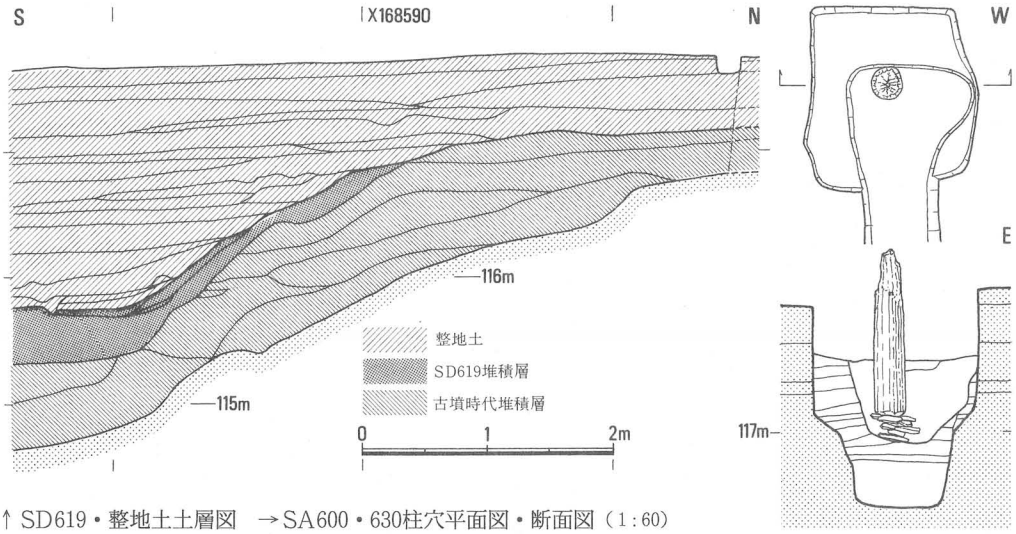
SK603は東西溝SD606の南方約3mにある不整形の土坑で、東西3.3m・南北2.4m・深さ0.7mである。SX604は正方形の柱穴で、一辺1.2m・深さ約1.2m。内部に柱抜取り穴がある。SK603と重複関係があり、SK603より古い。SX605はSK603を掘り下げて検出した。内部に1.2mの間隔で東西に並ぶ2個の穴を有する柱穴で、2個の穴は柱抜取り穴と考えられる。同様の遺構は紀寺跡第1次調査でも検出され、掘立柱遺構と命名されているが、幢幡の竿を建てた跡であると考えられる。東西2.1m・南北1.5m・深さは0.7mである。

斜行溝SD629は調査区北東隅から東西溝SD625Bに流入する幅4m前後の流

路である。堆積土には回廊に使用されていた双頭の鴟尾を含む大量の瓦や地覆石として使用された榛原石の切石などが含まれており、相当の水量のあったことを物語っている。出土土器には10世紀後半の土器が含まれており、南門の廃絶時期を示す資料となる。

この他に、東西塀SA631の北と南に東西溝SD639・637がある。これらはSA631改作時の雨落溝とも考えられるが、性格については不明な点が多い。SD639は平安時代の土坑SK638と重複し、SK638よりも古い。土坑SK636は東西長3.1m・深さ0.5mである。土坑SK635は深さ0.2m前後の不整形を呈する土坑でSK636やSS633の柱穴より新しい。10世紀前半の土器や漆塗りの木製品が出土した。土坑SK613・618は奈良時代と考えられる土坑である。

整地土下の遺構　南門の南で参道上を南北7m・東西6mの範囲で断割り調査を行った際に検出したSD619とSX620がある。SD619は丘陵裾部に沿った旧谷地形の流路と考えられ、北肩のみの検出に留まった。幅は5m以上、北肩からの深さは約1.6mあるが、上方の1.2mは整地土で埋められ、下半の0.4mに当時の堆積層2層が残る。上層は厚さ5mの茶褐色有機土層で、下層は暗灰色粘質土層であり、両層から木簡・飛鳥Ⅰの土器・木製品・木片・獣骨・二枚貝などが出土した。SX620は、東西に並ぶ柱穴で、北で西に振れる。柱掘形は一辺0.6m前後・深さは0.6m、柱間は東が2.3m、西が1.9mである。



↑SD619・整地土土層図　→SA600・630柱穴平面図・断面図（1:60）

遺　物

出土した遺物には、大量の瓦塼類、木製品（琴柱・曲物など）、木簡、金属製品（金銅及び銅製飾金具・刀子・鉄釘）、銭貨（和同開珎・延喜通寶・貞観永寶）、墨書土器を含む土器類、土製品（土馬・坩堝・鞴羽口）、石製品（砥石）などがある。現在整理中のため、特徴的な遺物のみ紹介する。

瓦塼類　丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・棰先瓦・鴟尾・鬼瓦・面戸瓦のほか、塼仏も１点出土した。３月末現在の整理による出土点数は83頁表に示した。

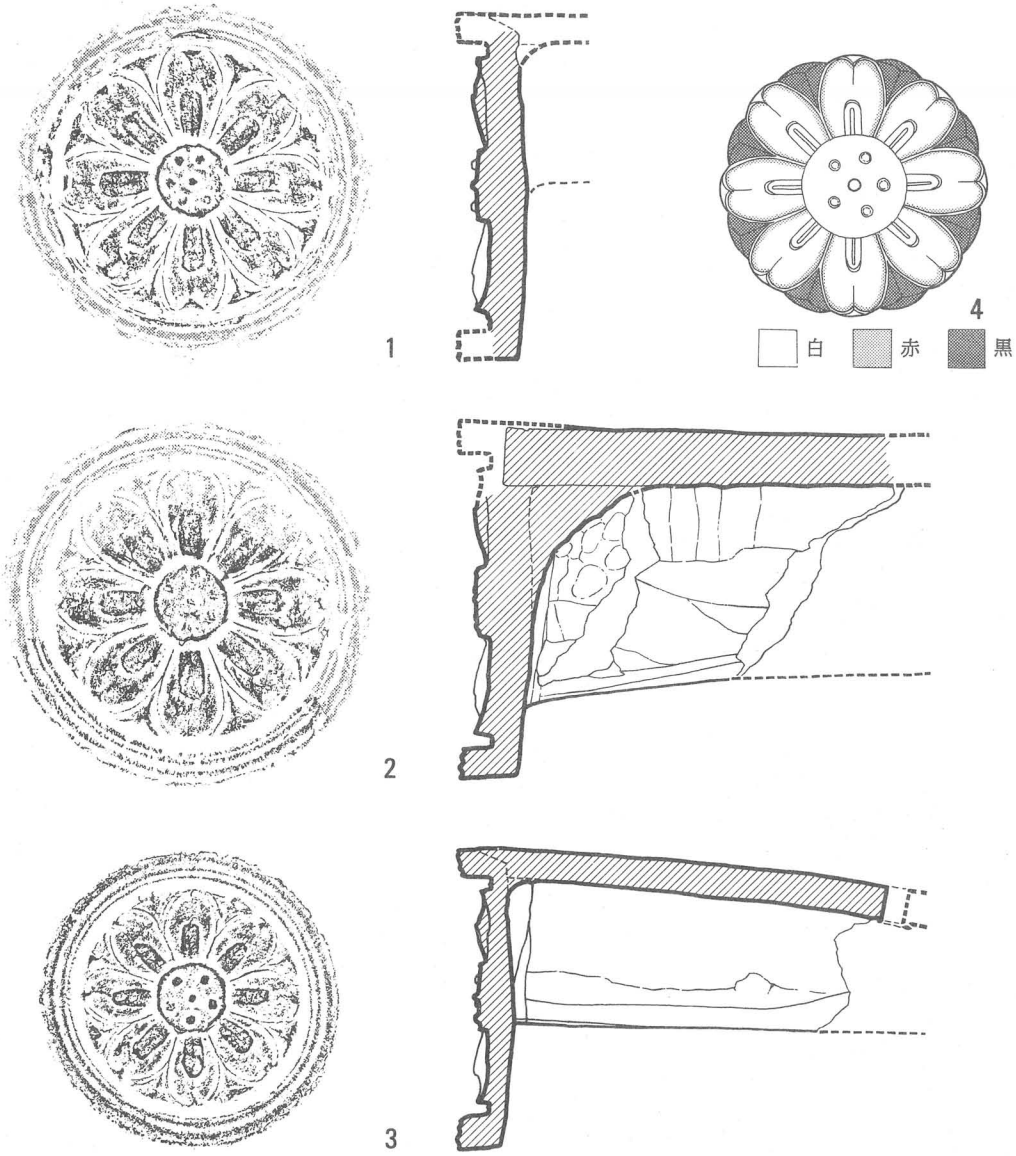
軒丸瓦はいずれも単弁８弁の「山田寺式」である。従来細分しているＡ～Ｆの６種すべてが出土した。出土点数はＤ（83頁・３）が最も多く、７割を越える。これに次ぐのがＡで１割５分ある。Ｄは過去の調査によって回廊・中門の所用軒丸瓦と推定されており、南門の所用軒丸瓦もＤとみてよい。また、今回出土したＡに、２種の丸瓦部接合手法を確認した。山田寺の軒丸瓦はＡを含め、丸瓦の筒部先端を断面が片枘形に加工し刻みを入れた後、瓦当裏面の上端に接合する手法が特徴的である（1）。ところがＡの一部には、筒部先端を全く加工せず、内面接合粘土を多量に用いるものがある（2）。後者は前者に比べ笵傷が著しい上に胎土にも差があり、製作時期の違いをうかがわせる。

軒平瓦はすべて重弧紋である。三重弧紋１点の他は、すべて四重弧紋である。この中には、側縁をＬ字形に折り曲げた隅軒平瓦が数点含まれている。

棰先瓦は、Ｄが約４割、Ｂが３割５分ほどで、この２種が南門の主要な棰先瓦と考えられる。棰先瓦には、彩色が施されていたことが判明した。裏面を除く全面に白土を塗った後、弁の輪郭線内側をベンガラと思われる赤色の顔料で縁どり、さらに間弁を黒く塗る（3）。

鴟尾は４個体以上、いずれもこれまでに出土しているものと同じ意匠であるが、なかに、互いに直角につながる２つの胴部をもったものがある。これは二つの胴部と一つの腹部・鰭部を備えた「双胴単尾」の鴟尾と考えられ、回廊の四隅に飾られた鴟尾にほぼ間違いがない。

木製品・金属製品　SD619の堆積層・造営に関わる整地土・SD625Ｂ・SK635から出土した。SD619堆積層出土品には曲物底板・刀子・部材などがある。刀



山田寺出土軒丸瓦・棰先瓦（1：4）

	軒丸瓦							軒平瓦	棰先瓦							鴟尾	鬼瓦	
	A	B	C	D	E	F	合計	合計	A	B	Ca	Cb	D	F	合計		蓮華紋	鬼面紋
点数	42	14	15	199	2	1	273	66	18	137	0	70	158	3	386	78	3	1
百分率	15.4	5.1	5.5	72.9	0.7	0.4	100 (%)		4.7	35.5	0	18.1	40.9	0.8	100 (%)			

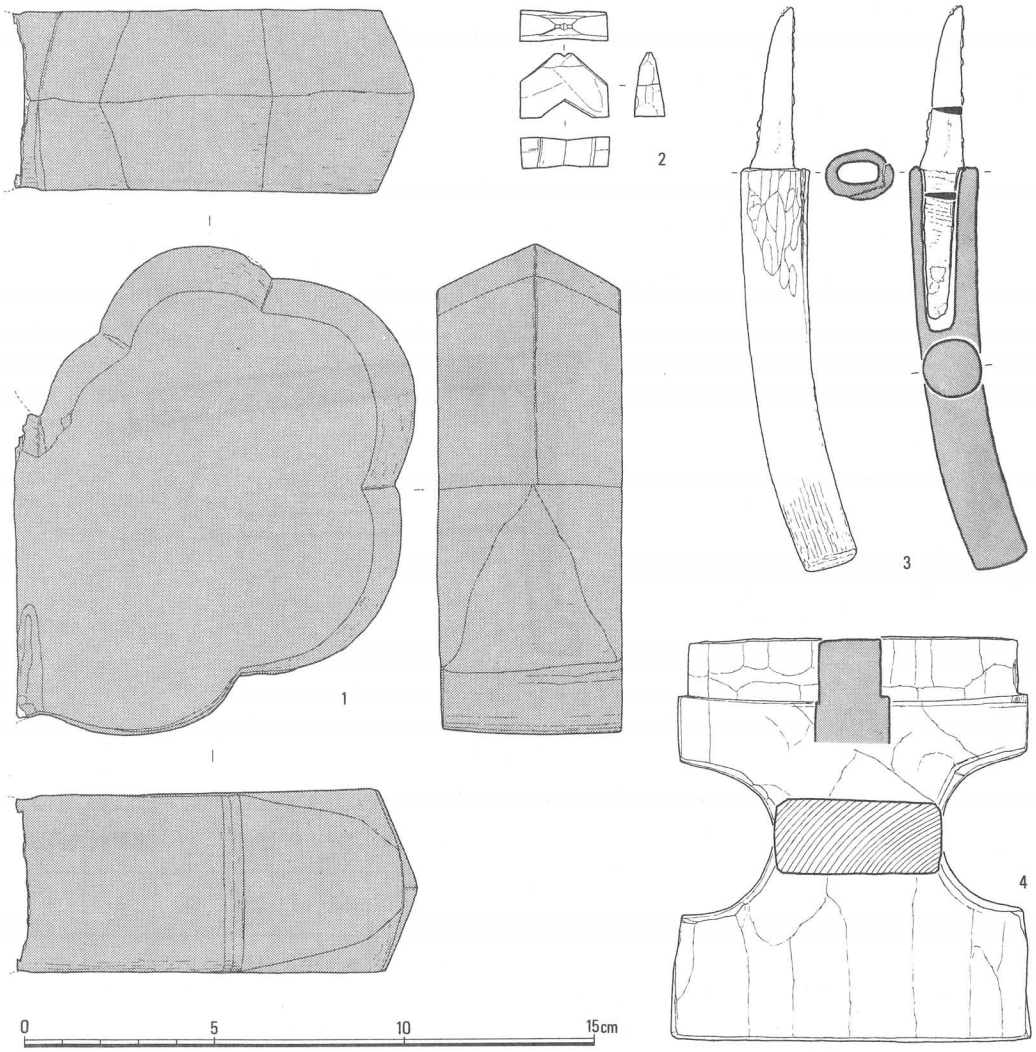
山田寺第7次調査出土瓦集計表（90年3月末現在）

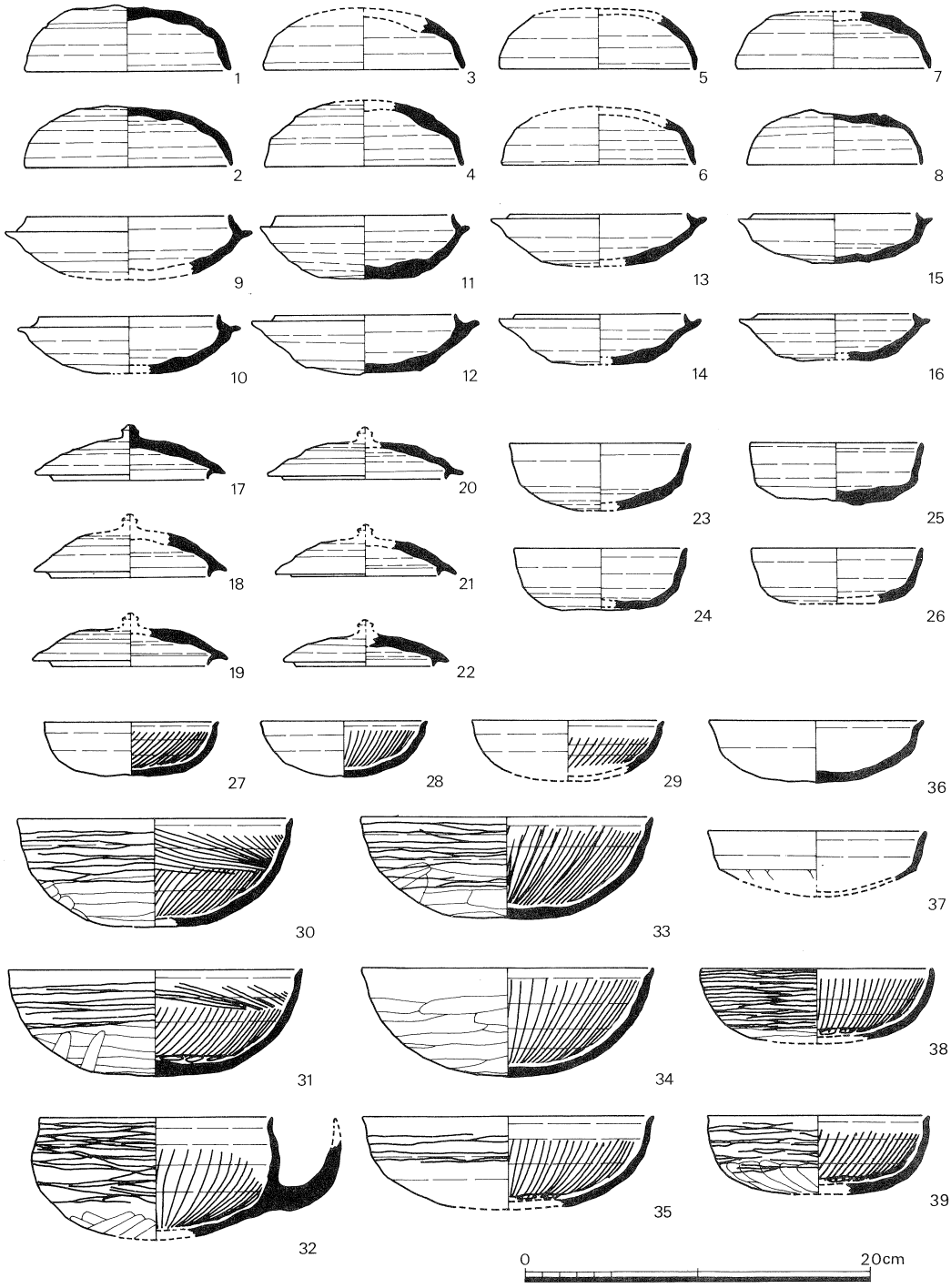
子（84頁・3）は鉄の刀身をとどめ、柄は角製である。部材（4）は脚であろう。整地土から琴柱（2）、SD625Bから曲物底板が出土した。SK635出土品（1）は断片で、雲形の厚板に黒漆を施す。扁額の部材の可能性がある。

土器類　ここでは造営に係わる整地土やSD619堆積層の出土土器を85頁に示した。これらの土器はいずれも従来の飛鳥地域の土器編年の飛鳥Ⅰの様相を示すが、さらに細分される余地があり、その詳細については再度検討したい。

このほかSD625Bからは奈良時代後半の土師器皿の底部外面に『山田寺』と墨書した土器（裏表紙）が出土し、寺名を証明する資料として注目される。

木簡　木簡は、造営前の旧流路SD619の北肩から、49点（うち削屑43点）が出土





↑出土土器（1～3・9～12・22・23・27・32～34：SD619、その他：整地土）

←出土木器（1部材：SD635、2琴柱：整地土、3刀子・4部材：SD619）

した。以下に主要なもの2点の釈文を掲げる。なお②と同筆と思われる「城」の文字を習書した削屑が10点余出土している。

①・□悪悪　　081型式　　②　□□城城城　　091型式

・□身身　　(116)×39×3　　〔城城カ〕

□□□

まとめ

今回検出した南門は天武朝に建立され、10世紀後半から11世紀前半に廃絶したと推定される。南門を検出したことにより、塀で囲まれた寺域が判明した。南北規模は、南門心と北方の第6次調査や1978年の水道管埋設工事の際に検出した東西塀（位置図A地点）間で約185mとなる。東西規模は、第4次調査で検出した南北塀SA500を伽藍中軸線で西に折り返すと東西118.44mの数値が得られる。なお、南門と中門の心々距離は18.5mで飛鳥寺に近い数値となる。

礎石建物である南門の前身施設として一本柱の掘立柱塀の存在を確認した。構造的な南門が作られ周辺が整備された年代は天武朝と推定され、金堂・回廊の作られた皇極朝には、塀のみが巡っていたと考えられる。従って南門地区では［掘立柱塀］→［礎石建ち南門と掘立柱塀］→［礎石建ち南門と築地］という三時期の変遷が考えられるようになった。南門の前身施設が掘立柱塀である要因としては、願主である蘇我倉山田石川麻呂の事件や山田寺近辺に推定される山田道からの出入りが西門で行われたことなどが考えられよう。この点については、西門地区の調査を計画しており、今後の発掘調査を通じて解決していきたい。また、南門は単層・切妻の建物で棟通りの柱間全てが扉となる「三間三戸」の形式であることが判明した。古代の寺院では類例がなく注目される。

造営に伴う整地土下では掘立柱柱穴と溝SD619を検出し、SD619からは木簡が出土した。これらの遺構・遺物は山田寺造営（641年）前の時期のものである。木簡が含まれていることから単なる集落とは考え難く、山田寺建立の願主である蘇我倉山田石川麻呂の邸宅「山田家」の一画である可能性があり、その手懸かりを得たことは意義深い。また、伴出土器はいずれも飛鳥Ⅰの様相を示しており、飛鳥Ⅰの年代の下限を示す資料としても興味深いものである。

4　川原寺の調査（1988－2次）

（1989年1月）

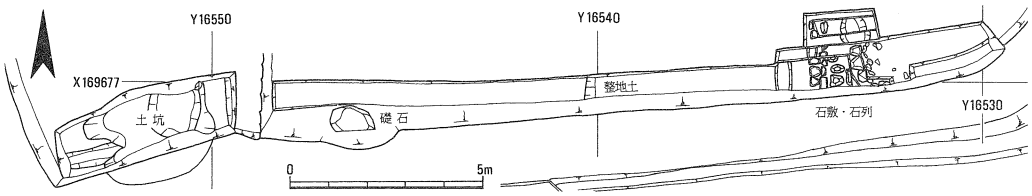
この調査は、史跡川原寺跡の東辺・北辺を通る農道の拡幅工事に伴う事前調査として、高市郡明日香村川原で行ったものである。調査地は川原寺「北方建物」のすぐ北側で、「北方建物」がある水田の北西端から、東方に大きく段をなして下降する地点までの約25ｍについて、幅１ｍの調査区を設けて実施した。

遺構　調査区西端での層序は、農道構築土の直下が黄灰色の花崗岩風化土の地山で、その上面で土坑１基を検出したが、それは「北方建物」礎石上面の高さよりも約0.8ｍ低い。土坑の東は水田が一段低く、すでに地山面も大きく削られているが、調査区中程から東には黄褐色粘土の整地土層が広がり、調査区東端では、地山と整地土の間に青灰色粘土層が堆積し、整地土の上は遺物を含まない黄褐色粘質土で埋め立てられている。

検出した主な遺構は、調査区西端の瓦を多量に含む土坑１基と、調査区東寄りの石列であるが、石列と土坑との中間で整地土の落込みを、また東端で東に大きく下降する地山の落込みを確認した。

西端の土坑は直径２ｍ余りの不整円形で、深さ0.3ｍである。埋土は暗灰色粘質土の上層と暗灰色砂土の下層とに分かれるが、いずれからも多量の瓦片とともに平安時代初めの土器が出土し、下層からは「隆平永宝」８枚が出土した。瓦には川原寺創建時の複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦、及び平安時代の軒平瓦などがあり、寺域中央部の瓦溜りと同様、建物廃絶に伴う土坑と考えられる。

調査区東寄りの石列は、直径30㎝大の花崗岩を東に面を持たせて南北方向に並べたもので、東と西に約１ｍの間隔をもって２列配置されている。２列の



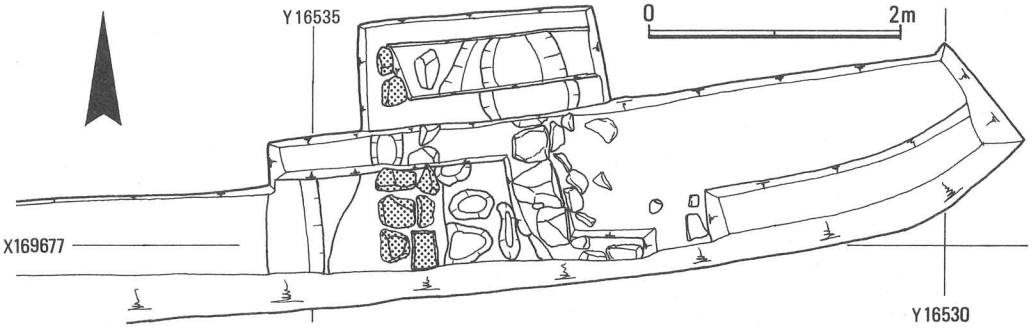
川原寺1988－２次調査遺構配置図（1：200）

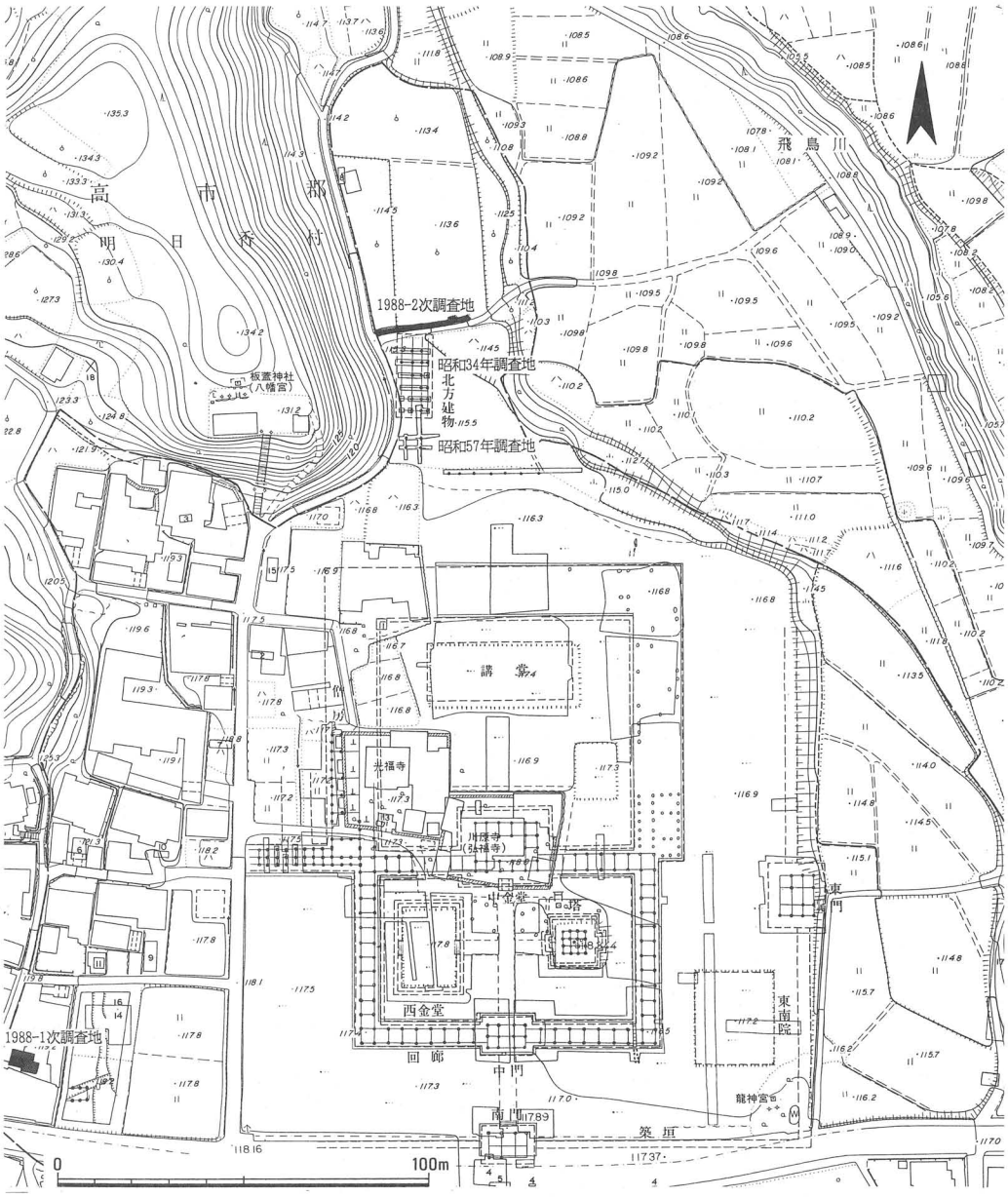
石列はともに黄褐色粘質土の整地土中に据えられ、西側石列の上端が東側のそれよりも約15㎝低く、その上に20㎝大の偏平な川原石を南北方向に敷き並べている構造で、石列の上面は瓦を含む砂層で覆われている。石列に伴う建物などが見られないことからすれば、これは、東へ大きく下降する地形を整地し、その縁辺を石列で留め、上面を石敷舗装した施設と考えられる。整地土層及びその下層の青灰色粘土層には川原寺所用の瓦は含まれず、土器も7世紀前半代のものばかりである。

まとめ　川原寺の「北方建物」については昭和34年・57年の調査で、東西3間・南北9間の礎石建ち南北棟建物であると推定されているが、北端については、今次調査の農道以北で大きく下降する地形から推定されており、農道以北での礎石・基壇土の確認が今次調査の課題であった。しかし、調査では昭和34年調査時に注意されていた農道上の礎石を確認したものの、礎石は農道建設時に埋め込まれたもので、旧位置を保つものではない。また、農道下での土層観察の結果も、基壇土に相当する土は確認されず、建物に近接する調査区西端部で礎石上面から約0.8ｍも下がった位置に、瓦廃棄の土坑が掘られていることからすれば、北方建物は先の推定通りの規模であり、その廃絶は、土坑出土遺物から、平安時代後期のことと考えられる。

調査区東方で確認した整地を伴う石列・石敷は、整地土に瓦が含まれず、石敷を覆う土に川原寺の瓦が含まれることから、寺以前の遺構あるいは寺創建時の遺構の二通りの解釈が可能である。しかし、石列遺構は周辺の地形にあわせて幾分北で西に振れながら南と北とに延びており、北方建物を含む伽藍の中軸線と一致しない点、石敷上面の高さと北方建物の礎石上面高との比高が約1ｍと大きい点から、両者を同時期の遺構とすることには疑問が残る。整地土中の土器が7世紀前半代のものばかりであることを合せて考えると、川原寺創建以前の遺構である可能性が高いといえよう。いずれにせよ、幅狭い調査で1地点を確認したにすぎず、石列・石敷の時期と性格については、今後の調査成果を待って再考したい。

川原寺1988―2次調査位置図（1:2000）、石敷・石列詳細図（1:60）→


Y16535
0
2m
X169677
Y16530


高市郡
明日香村
飛鳥川
1988-2次調査地
昭和34年調査地
北方延物
昭和57年調査地
板蓋神社
(八幡宮)
講堂
光福寺
川原寺
(弘福寺)
中金堂
西金堂
回廊
中門
南門
築垣
東門
東南院
龍神宮
1988-1次調査地
0
100m

5　山田道第１次調査

（1988年12月～1989年４月）

この調査は県道桜井―橿原線の拡幅に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山で行ったものである。県道は、幅10ｍ・総延長650ｍにわたって、現県道の北側に拡幅される計画であり、今回は初年度分として、東西191.5ｍ・南北６～７ｍの範囲について調査を行った。

調査地は、奥山・久米寺の南方約200ｍの水田で、東から西へ傾斜する緩傾斜面上にあり、そのほぼ中央を八釣川が北流している。当地は「山田道」推定地であり、藤原京東四坊大路（東京極大路）推定地の東側にあたる。

「山田道」は、大和盆地東縁を南北に走る上ッ道の南延長部にあたり、現在の桜井市と飛鳥方面を結ぶ古道である。平安時代初めに成立した『日本霊異記』に「安倍山田前之道」、『万葉集』（巻十三3276）に「山田道」と記載され、古くから存在していたことがわかるが、造られた時期・正確な位置などについて不明な点が多い。岸俊男氏は、藤原京の南京極を「山田道」にあて、「山田道」が藤原京設定以前から存在していたと推定している。今調査は、この「山田道」に関わる遺構を検出し、あわせて当地区の土地利用状況を把握することを目的に行った。

遺　構

調査区に便宜的に４つに分け、東からⅠ区（東西43ｍ、南北６～７ｍ）・Ⅱ区（68×7.2ｍ）・Ⅲ区（48×6.2ｍ）・Ⅳ区（20×7.4ｍ）とした。

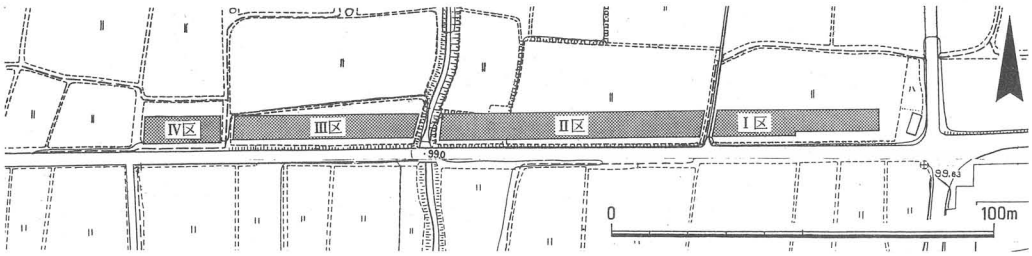
層序は各調査区ごとに異なる。Ⅰ区では、耕土・床土・茶褐色砂質土・黒褐色砂質土（弥生時代包含層）・黄褐色砂質土（地山）があり、西端部では茶褐色砂質土の直下が地山である。遺構の検出は黒褐色砂質土ないし地山の上面で行なった。Ⅱ区東半では、耕土・床土・茶褐色土・礫混茶褐色土（地山）があり、地山上面で遺構を検出した。Ⅱ区西半では、耕土・庄土・黄褐色ないし灰褐色砂質土・褐色系細砂層・黒褐色土（古墳時代包含層）・灰色砂層（弥生時代包含層）・地山があり、黒褐色土上面で遺構を検出した。Ⅲ区東半では、耕土・床土・礫

混暗褐色土・黄褐色砂質土（地山）があり、礫混暗褐色土の上面で遺構を検出した。Ⅲ区西半では、耕土・床土・茶褐色土・暗褐色土・黒褐色土・黄褐色粘質土（地山）となり、西端では茶褐色土の直下が地山である。暗褐色土ないし地山の上面で遺構を検出した。Ⅳ区ではⅢ区と状況が異なる。Ⅲ区とⅣ区の中間点から西へ向けて地山が下がり、Ⅳ区全体を含む大きな窪地状（SK2380）を呈している。この窪地の深さはⅣ区西端部で0.7ｍである。この窪地には、下から①暗灰色粘土（弥生式土器包含）・②灰褐色粘土ないし粘質土・③灰褐色系砂質土があり、②・③層には飛鳥Ⅰ期の土器を含み、６世紀末～７世紀初頭に埋め立てられたと考えられる。遺構はその埋土の上で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・石積護岸溝のほか素掘り溝・竪穴住居跡・土坑などがあり、これらは主に弥生時代・古墳時代・６世紀末～８世紀後半に属す。

弥生時代の遺構　各調査区に存在するが、７世紀の遺構が広がっているため、一部だけを検出した。Ⅰ区東端の溝SD2253、Ⅰ区西端の竪穴住居跡SB2277などがある。SD2253は幅３ｍ・深さ0.15ｍで弧状を呈し、何らかの施設の一部の可能性がある。SB2277は、復原直径約９ｍの円形住居跡で、畿内第Ⅲ様式土器が出土した。

古墳時代の遺構　弥生時代の遺構と同様に一部のみを検出した。Ⅰ区東端の南北溝SD2250、竪穴住居跡SB2255、Ⅰ区西端の竪穴住居跡SB2281、Ⅱ区東端の竪穴住居跡SB2290などがある。SD2250は幅1.5ｍ・深さ0.4ｍである。SB2255は一辺4.1ｍの方形住居跡、SB2290は一辺4.8ｍの方形住居跡で、ともに５世紀後半のものである。



山田道第１次調査区配置図（1：2000）

6世紀末～8世紀後半の遺構　掘立柱建物6棟以上・掘立柱塀12条以上・石積護岸溝1条・素掘り溝1条がある。これらの遺構は、出土遺物・重複関係・方位からみて大きくA～Eの5期に区分できる。

A期　Ⅱ区中央の石積護岸溝SD2320のほか、北で西へ約5°振れる掘立柱の遺構が属す。Ⅰ区西半の掘立南北塀ＳＡ2270、Ⅲ区西半の掘立柱南北棟建物SB2356・掘立柱南北塀SA2358・掘立柱建物SB2359・SB2361、Ⅳ区東半の掘立柱東西塀SA2370が属す。

SA2270は2間分検出した。柱間寸法は1.75ｍ（6尺）である。柱掘形は一辺0.5ｍの方形で、深さは0.2ｍである。

SD2320は、掘形の幅約6ｍ、両願に拳大～人頭大の川原石を積み上がるが、積み方は乱雑で、南西岸と北東岸の石は崩落している。底石はない。深さ1ｍ・内法幅約3ｍである。堆積層は大きく6層に分かれ、各層から飛鳥Ⅰの土器が多く出土し、使用年代の一端を6世紀末～7世紀初頭に置くことができるが、溝の開削年代は不明である。

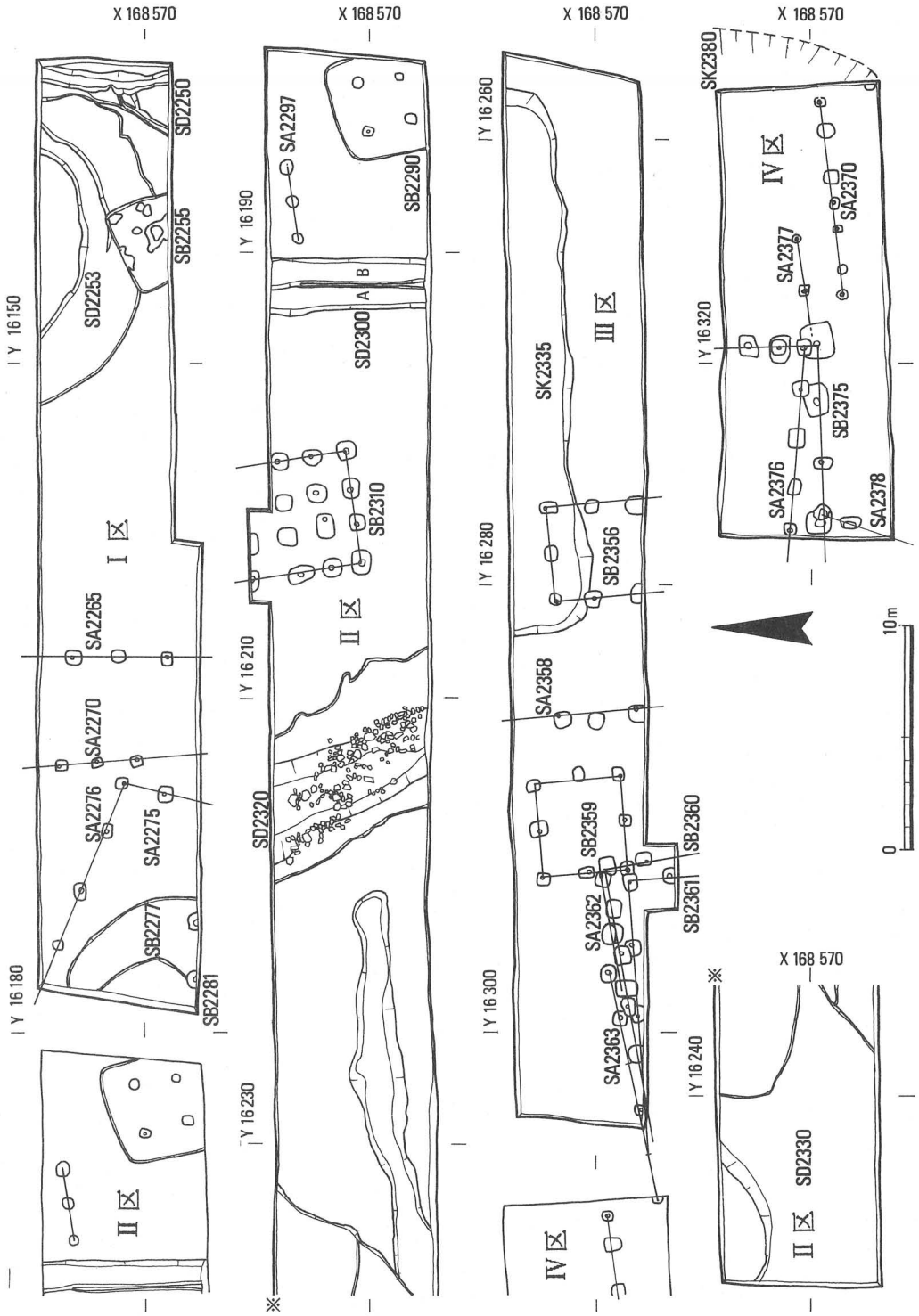
SB2356は、桁行3間以上・梁行2間の建物で、柱間寸法は、桁行1.7～2ｍ・梁行2.1ｍ（7尺）等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8ｍの方形で、深さは0.4ｍである。奈良時代後半の大土坑ＳＫ2335と重複し、土坑より古い。

SA2358は2間分を検出した。柱間寸法は1.75ｍ（6尺）である。柱掘形は一辺0.7ｍの方形で、深さは0.2ｍである。SA2358の北端はSB2356の妻柱筋と揃っている。

SB2359は2間×2間の建物で、柱間寸法は東西方向2.1ｍ（7尺）等間・南北方向1.95ｍ（6.5尺）等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8ｍの方形で、深さは0.4ｍである。

SB2361は2間×2間以上の建物で、柱間寸法は東西方向3ｍ（10尺）等間・南北方向1.8ｍ（6尺）である。柱掘形は一辺0.7ｍの方形で、深さは0.5ｍである。SB2359より新しい。

SA2370は6間分を検出した。柱間寸法は1.1～2.1ｍ（4～7尺）、柱掘形は一辺0.4～0.7ｍの方形で、深さは0.35ｍである。この塀の柱筋は、SA2358の



山田道第１次調査遺構配置図（1：300）

侵北端、SB 2356の妻柱筋と揃う。柱の抜取りに際して、柱をまっすぐ上に引き抜いた後に、黄色の山土で埋め戻している。

B期　北で西へ約10°振れる遺構が属す。Ⅱ区東半の掘立柱東西塀SA 2297・掘立柱建物SB 2310、Ⅲ区西端の掘立柱東西棟建物SB 2360・掘立柱東西塀SA 2362・掘立柱東西塀SA 2363、Ⅳ区東半の掘立柱東西塀SA 2377があり、石積護岸溝SD 2320は本期にも存続する。

SA 2297は2間分を検出した。柱間寸法は1.6mである。柱掘形は径0.4～0.6mの円形で、深さは0.2mである。

SA 2310は3間×3間以上の総柱建物で、柱間寸法は、東西方向1.7m（6尺）等間・南北方向1.65m（5.5尺）等間である。柱掘形は一辺0.7～1.0mの隅丸方形で、深さは0.5mである。

SB 2360は桁行4間以上・梁行2間以上の建物で、柱間寸法は桁行2.1m（7尺）等間・梁行1.95m（6.5尺）である。柱掘形は一辺0.8mの方形で、深さは0.4mである。　SA 2362は2間分を検出した。柱間寸法は2.6m（9尺）等間である。柱掘形は一辺0.6～1.0mの方形で、深さは0.3mである。SB 2360より古い。

SA 2363は5間分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、深さは0.35mである。SB 2360より古い。

SA 2377は1間分を検出した。さらに西に延びると思われるが、C期のSB 2375と重複している。柱間は2.4m（8尺）、柱掘形は一辺0.5mの方形で、深さは0.45mである。柱の抜取りに際して、柱をまっすぐに引き抜いた後に、黄色の山土で埋め戻している。

C期　北で西へ約2°振れる遺構が属す。Ⅰ区中央の掘立柱南北塀SA 2265、Ⅱ区東半の素掘り南北溝SD 2300A・B、Ⅳ区西半の掘立柱東西棟建物S2375がある。

SA 2265は2間分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形は一辺0.6mの方形で、深さは0.2mである。

SD 2300はA（古）・B（新）の2条があり、BはAを東側にずらして付け替えたものである。Aは幅1.2m・深さは0.35m、Bは幅1.2m・深さ0.3mで、堆

積土から飛鳥Ⅱの土器が出土した。

SB2375は、桁行4間以上・梁行3間以上の建物で、柱間寸法は桁行2.7m（9尺）等間、梁行1.4と1.7m（5～6尺）である。柱掘形は、一辺0.9～1.6mの方形で、深さは0.6mである。柱の抜取りに際しては、柱をまっすぐ上に引き抜いた後に、黄色の山土で埋め戻している。

D期　北で東に振れる遺構が属す。Ⅰ区西半の掘立柱東西塀SA2276・掘立柱南北塀SA2275、Ⅳ区西半の掘立柱東西塀SA2376・掘立柱南北塀SA2378が属す。

SA2275は1間分を検出したが、さらに南へ伸びると思われる。柱間寸法は1.8m（6尺）、柱掘形は一辺0.5m～0.7mの方形で、深さは0.2mである。

SA2276は3間分を検出した。柱間寸法は2.3～2.9m（8～10尺）で、柱掘形は一辺0.4～0.7mの隅丸方形で、深さは0.25mである。

SA2376は4間分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間、柱掘形は一辺0.5～0.8mの方形で、深さは0.5mである。

SA2378は1間分を検出したが、さらに南に伸びると思われる。柱間寸法は1.4m（5尺）で、柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅丸方形で、深さは0.6mである。

SA2376・SA2378ともに、柱を抜き取った後に、黄色の山土混じりの土で埋め戻している。

E期　Ⅲ区東北部の大土坑SK2335がある。東西24.5m・南北3.5m以上・さ0.9mで、埋土から奈良時代後半の土器・平城宮式軒平瓦（6691）が出土した。

その他の遺構　Ⅱ区西端のSD2330は、江戸時代以降の河川である。現在、Ⅱ・Ⅲ区の間には八釣川が流れており、SD2330は八釣川の旧流路であろう。

遺　物

出土した遺物には土器と瓦がある。土器には弥生時代・古墳時代・6世紀末～7世紀前半のものが多い。石積護岸溝SD2320の堆積土とⅣ区のSK2380の埋め立て土からは、多量の飛鳥Ⅰの土師器・須恵器が出土した。SD2300からは飛鳥Ⅱ、SK2335からは奈良時代後半の土器が出土した。

まとめ

1　各期の年代についてまとめておく。

A期の遺構は、Ⅳ区では飛鳥Ⅰの土器を含む整地上の上に造られている。また、石積護岸溝ＳＤ2320はＡ・Ｂ期を通じて存在し、堆積土からは多量の飛鳥Ⅰの土器が出土した。したがって、Ａ・Ｂ期の遺構は6世紀末～7世紀初の比較的短期間に造り替えを繰り返したものと考えられる。

Ｃ期は南北溝ＳＤ2300から飛鳥Ⅱの土器が出土しており、7世紀前半代とみられる。Ⅰ・Ⅱ区の北方の奥山•久米寺は7世紀前半の創建と考えられている。ＳＤ2300と創建期の奥山•久米寺との関連については、今後の検討課題である。

Ｄ期は年代の決め手がない。建物の方位がＣ期以前とかなり異なるので、時期が大きく下る可能性もある。しかしⅣ区では、Ｃ期以前の遺構と同様に、柱を抜き取ったあと黄色の山土で埋め戻す点で共通しており、そうへだたった時期まで下げなくとも良さそうである。1982年の奥山•久米寺東南方の調査では、7世紀後半～8世紀前半代の、北で東へ大きく振れる建物が見つかっている点を参考に、7世紀中頃～8世紀前半に収まるものと考えておく。

Ｅ期の大土坑ＳＫ2335は、奈良時代後半に属す。当調査区の西方約200mにある雷丘東方遺跡では、『続日本記』の760（天平宝字四）年から765（天平神護元）年にかけて記載された、小治田宮に関係する遺構が発見されており、ＳＤ2335とそれらの遺構の関係も、今後の検討課題である。

2　今回の調査の主目的は「山田道」の検出であったが、「山田道」に直接関係する遺構は、当調査区内では検出できなかった。Ⅰ区・Ⅲ区で検出した七世紀代の掘立柱遺構のうち幾つかは、調査区の南外に伸び、現地形からする従来の「山田道」推定地に及ぶことは確実である。今回の発掘所見は、「山田道」の所在についても、飛鳥の土地利用の変遷の中で検討すべきことを教えている。

3　当地において、特に6世紀末～7世紀前半にかけて、比較的多くの掘立柱建物群が造られており、ＳＢ2375のように規模の大きいものも含まれていることが判明した。発掘面積の関係で、建物の配置の全貌や性格を明らかにはできなかったので、この地域一帯における今後の調査の発展を待って検討したい。